立教大學新聞
発行所
豊島区西池袋3丁目
郵便番号 171
© 立教大学新聞学会
振替 東京 70852
電話(983)0111(代)内線688
発行人 小川 岩雄
責任者 御井 正義

早稲田学院
早慶合格第一位校 ☆全国理工系抜群
新宿区高田馬場駅際 駅二分ホーム中央
電話(03)9281(代) 白亜7階

問われる新たな運動論

学館闘争前進のために ①

立教大学に於いての学館設立の闘いが起って一〇数年間を経たが一貫した学館の存在意識を有しているのではなかった。「学生の福祉・厚生の場」―「学生の自治活動の保障の場としての学館」へと変遷していったのである。

11・22総長会見に於いてそのような展開でなされた闘争は総長の言う〝教える者と学ぶ者が協働を云々するのは水くさい〟といった形で学生自治―教授会自治―大学自治の所在、内容といったものがあいまいなまま規定されていった。完全に現在の教育情勢の本質が隠蔽されてしまったのである。そこで労働力再生産過程としての教育に視点をあてながら学館を捉えゆく(編集部)

―はじめに―
学館闘争と新たな胎動

10・八総長会見、10・二国際反戦デーに対する執行部のスト破棄それ以降の学部別の対話集会、全学学生集会、そして一一・二三総長会見と、この間の本学の学生は大学のかかえている諸矛盾へと突き進み、その中でそれらを赤裸々に暴き出そうとしている。

それをささえていた日本経済の高度発展に伴ないつつある「制度」を変化、解消させてゆく、戦後二三年を経た日本の社会はその一つの制度である大学を歴史の変動と共に根底から、揺ぶり始めている。この歴史の変動、高度資本主義国における諸問題、ベトナム戦争等々の諸矛盾の顕在化、そして社会主義国における諸問題、チェコ問題等々それは個別日本においてだけが例外ではない。戦後一貫してインフレ政策をとり、特に六〇年以降の池田内閣以降は設備投資で重化学工業部門に多大な投資を行ない、それに伴なって有能な技術者、管理者を養成するために、「教育投資論」―「人間の発展段階と個人の能力、適性に応じた効果的な教育」「教育費の効率的な配分と適切な負担区分」といったものが政府を配置資本主義界の中で公然と叫ばれるようになってきている。このように、戦前・戦後を通じて一貫して言われてきた「象牙の塔」的な神秘のベールがとりはらわれ、既成の大学に対する観念―理念上の大学、教育方針観に満ちているかが解るであろう。

このことは学部の対話集会、総長会見で大学当局が御用教授がロをそろえて言う、現実―歴史的具体的な大学の分析を抜きにしての大学共同体論、理念としての大学学生の精神等々がいかに虚りにまみれており、否、犯罪的であるか我々はハッキリ見たであろう。

我々はこの間、多くのものを問いかけた―「大学とは何か」、「学生は、如何なる存在であるのか」「教育とは何なのか」そしてそれを知るようになった。

学生会館問題が投げかけた波紋は決して小さくはない、それに既成の運動体も飲み込んでしまうほどのものである。だがそのようなものを問題に乗り越え新たな運動構築を成していくものが欠除している。それ故に現在の「大学のマスプロ化」「大学のマスプロ化という語で表現される、大学の社会化」に対する不安、不満といったもので自然発生的に生まれたエネルギーも、それらが衝撃的に爆発することはあっても不満が一定程度排出されれば急速に衰退していってしまうのである。

個別本学における学館問題に焦点をあわせる時、そこにおける個人の深さ広さを驚きでもって捉える。何故ならば、そこに自己の大学に対する既成像がもろくも崩れ去ってゆく過程を見るからである。その崩れ去った大学像をより細分化、解体化して新たな理念を構築してゆくかが我々にかせられた新たなものであろう。

帝国主義的再編と「教育」の役割

資本主義社会において会べてのものは会社に属したものとしては存在しえない。教育も商品化された労働力―生きた人的存在の中に実存していて、その何らかの使用価値を生産する度に運用するところの、肉体的、精神的能力の総体を生み出す会的過程の一環としてある。そこにおける学生の存在は基本的に労働力再生産過程にある、自己の労働力商品をより高度化することによって個別闘争に打勝って、資本主義生産様式にくり込まれていくものとして現象する。

現代資本主義体制下にあって、一方では合理化の進展特に顕在化するのは交通・運輸部門により車輌資本体制が進み能力以前の問題として肉体的労働としての安価な労働力商品が要請される、また二方では高度技術を身につけた精神的労働として労働力商品が要請される。

このような社会の分業化は特定の肉体的、精神的に発達した人間を形成要請してゆくのである。この社会的分業体制にあって大学教育はいわば精神的労働者育成をその主な任務とするのである。労働力再生産過程また労働力の基礎的育成と体制を守るイデオロギーの主体としての教育は個別大学に支配系統の確立をせまり、また資本主義社会―産業界に適合した「教育」を開始させる。

支配系統の確立を図り、学長のリーダーシップの確立を図り、学長のもと監査・運営、教育研究、学生の厚生・指導を担当する三人の副学長を置くことや、教授会「自治」の空洞化、というように間別に学生における中央集権化を強化させる。また産業界と密接した「教育」は一方で、産業界―資本主義体制の移行・再編成によって規定される。

世界資本主義は後進国諸国の市場における矛盾の激化―帝国主義的再編―技術革新、大量生産を徹底させて五年以降の日韓条約をテコとして、東南アジアに向けての自国内の過剰資本の輸出、援助(それは援助先の産業を一定程度発展させることによって消費意欲を高めさせ、それを吸収するといったものであり、また円借款によって工場研究所等を建設してゆくといったものである)そして設備投資に意味している。具体的には六〇年度の西田内閣に端的に現われた重化学工業における多大な設備投資―技術革新、大量生産を徹底させて五年以降の日韓条約の再編成―技術革新、大量生産を徹底させて五年以降の日韓条約をテコとして、東南アジアに向けての自国内の過剰資本の輸出、援助(それは援助先の産業を一定程度発展させることによって消費意欲を高めさせ、それを吸収するといったものであり、また円借款によって工場研究所等を建設してゆくといったものである)そして設備投資に

激化する産業再編
労働力再生産過程としての教育

そのような高度資本主義の成長による産学協同といったものが志向するのは資本による学問の直接的利用であり、それを通じて学生大衆を体制内化し、有能な労働力を再生産してゆくことである。

しかも、そのような独占資本は労働力商品を用産化してゆく過程でその費用を全部学生大衆において学生に負担させているのである。

現実的にはカリキュラムの再編成が進み、その傾向は細分化、専門化の方向として進んでおり、一般教養の軽視、また実践的部門の増大が均分相量をかけられている。産学協同の増大は同時に独自資本による躍りんに対して適応を強化させるとしている。「貧労働の資本」としての国大協・私大連合自治を潰滅させようとしている。

高度に成長した資本主義を背景として教育行政、また大学内部の自主規制としての国大協・私大連合、学生組織、学生自治を潰滅させようとしている。「貧労働の資本」としての国大協・私大連合、学生自治を潰滅させようとしている。

産学協同の増大は同時に独自資本による躍りんに対して適応を強化させる

情況―'68
'60年から'70年への断章

一九六八年の幕は閉じようとしている…〈政治の嵐〉が吹きすさび、慌ただしい日常性の中に安眠を貪ることを全てのものが拒否する…六〇年の〈敗北〉が未だ総括されえてないだろう〈冬の季節〉には、しかし、あまりに多くの出来事があったろう……編集部では〈60年から70年への断章〉と題して六八年の思想情況・映画情況を振ってみた……

思想
国家と擬制と―急進主義の風化―

世界的な視野でいまだ全ての思想がためされている。世界的な連帯がでいま新たな胎動が生まれようとしている。フランスの五月をおそった急進主義の嵐や、チェコへの東欧四ケ国軍の侵入に再び崩壊した（「社会主義」の神話）は、激動する情況の中で、その情況をどのように理解し、変革するのかという問いを全ての思想にあらためて投げかけた。フランス（五月革命）「を撃する子供隊の写真の中に三つのMーマルクス・毛沢東・マルクーゼ・トロッキー、ゲバラの写真が何の不思議もなく雑居していたのはそのことを物語っている。

一九五六のハンガリア革命の流産はまだ多くの思想家に何の痛苦もなく受けとめられているだろうか…。

主体性論争とエンゲルス

田中克六「主体的唯物論への道」の復刊を中心として戦後〈主体性論争〉が再び蒸返したことは現在のマルクス主義理論戦線に新しい問題をまきおこすかのように見えた。国際共産主義運動の硬直化と堕落に多くの者が絶望しながらも、新たな胎動のほとんどさえも展望を失なった急進主義の爆発としか意場せざるをえない現代において、それは八古い皮袋に入った新しい酒〉のように時代を覚醒するかのように見えた。六〇年安保の高只中で争うように読まれたという田中「主体的唯物論」にまつわる〈伝説〉はそれだけでたしかに熱狂的であり、事実田中はこの本の復刊を期に理論戦線に復帰を遂げたのだった。しかし、この復刊は「歴史は二度繰り返される、一度目は悲劇として二度目は喜劇として」という言葉さえも忘れさせてしまうほど滑稽劇的だった。

五三年の「スターリン批判」が世界のマルクス主義者に混乱と動揺をまきおこす中で、「現代唯物論の客観主義的偏向」に叛旗をひるがえした田中「主体的唯物論」はすでに死を宣告されていたのだ。主体をあらゆる客体的限定からあらかじめ解放された完全に自由なものとしてしかとらえられないことから自己崩壊する絶対者としての〈主体〉主義という裏返しのヘーゲル主義に田中が陥いっていたことは、田中「主体的唯物論」が最初に発行されてからのスターリン主義の徹底的な批判の中で、〈上揚〉されたはずなのだったのだから……。

また広松渉「エンゲルス論」や黒田寛一「資本論以後自作」の発行は長い間マルクス主義において一種の〈タブー〉のようになっていたエンゲルスへの評価という問題を投げかけた。かって三木清すらも「弁証法は自然自体にはなくて、人間の自然に対する働きかけの中にのみ存在する」と主張して批判したエンゲルスの「自然の弁証法」の歴史主義的傾向が実質的に〈上揚〉されたのだったのだ。そして、それはこのようなエンゲルスの傾向がいわゆるロシア・マルクス主義の中で「開花」させたスターリン主義哲学への批判でもある。

革命の哲学であるマルクス主義の革命性が困難な情況のさまざまな部所でその革命性を蘇生に回復し、偽りのマルクス主義のベールを大胆にはいでいるのだといえるだろう。

「五月革命」とアメリカの夏

パリ大学ナンテール分校に始まったフランス「五月革命」はドイツSDSの動きと結合し、西ヨーロッパにおいて急進主義の暴発をもたらした。ドル危機によってゆすぶられている現代帝国主義世界を根底からくつがえすかのようにそれらは、アメリカの黒人反乱と同様に、既成の枠をはみだした形で一九六八年を動かした。

パリ「和平」会談のまっただなかで物凄し激烈にたたかわれたフランス「五月革命」―それは、直接的にはソルボンヌの学制問題を発端とし、ベトナム戦争反対とそれがからみあわされ、しかもこの反対闘争に対する強権的な弾圧をキッカケとして爆発した。この闘いは続々と学園占拠として、さらに労働者解放の自然発生的なゼネストや工場占拠として燃えひろがった。このような激烈な闘いの先頭に立ち、その主要な担い手となったのは、すべての既成左翼および伝統的労働組合指導部からはみだした数々の急進主義的な諸党派・諸政治潮流であった。しかし、その高揚は、時代のスターリニストがつねにそうであったような仏共産党やCGTの裏切りと、左翼急進主義みづからの展望の欠如ーもりあがった階級闘争のうねりを国家権力打倒へ転換させていくという戦略的・組織的諸問題ーのゆえに終息させられていった。

また、アメリカ帝国主義の腐った心臓部における黒人解放運動の急進化はベトナム戦争の激化に呼応してその激烈さをますます倍化し、六八年の「熱い夏」には社会主義的諸潮流のイデオロギー闘争により一定の質的転換さえもが生みだされた。

たしかに、アメリカへブラックパワー〉〈フランス〉〈五月革命〉〉・ドイツ〈SDS〉〉と燃えとした左翼急進主義の「国際主義」は制進したかもしれない。しかし、そこには、左翼急進主義ゆえの風化現象が待ちうけているだろう。

「チェコ」以後

八月二〇日深夜、チェコ国境に突如として現われたソ連・東欧四ケ国軍の戦車と、その巨砲に倒れていったチェコ市民の姿は、「社会主義とは何か」「社会主義国家とは何か」という問いを全ての人々の前につきつけた。

それは、西ヨーロッパ帝国主義に対する防衛、FECに対抗するためのコメコンの強化といった、〝大義名分〟によって、これまでクレムリン官僚がソ連中心主義に支配し統制してきたクレムリン官僚に対する一連の東ヨーロッパ人民民主主義諸国での、「新しい胎動」へのしめつけとしてあった。しかしそれはチェコ人民の内外の不満を「国家の民族的特殊性」を強調しつつ上から行なわれた「自由化」「民主化」との対時としかなかった。そしてチェコ人民は〝第二のハンガリア〟を創り出すこともできず、ソ連官僚とチェコ官僚との〝ボス交〟の中に自らの怒りを、終息させていってしまった。それは一九五六年にポーランドやハンガリアをおそった「非スターリン化」運動の余波というよりは、むしろユーゴスラビアの「共産主義」を模倣することになって自国の危機をのりきろうとする強制的「民族的特殊性」のもとで行われようとしたことだからだろう。

このようなスターリニスト国家および各国共産党の、全世界のプロレタリアートの断乎たる階級闘争の組織化と推進を完全に放棄した姿は、中国にも現われている。フルシチョフ修正主義の打倒を呼びかけ中国共産党の毛沢東指導部は、現在「文化大革命」なるものを行なっている。そしてこのような〝文化大革命〟そのものが現代ソ連邦の政治経済への本質的批判にはなりえず、むしろそのこまかい諸現象をあげつらいながら、「それがブルジョア資本主義化しつつある」などと没理論的にしか認識しえない、道徳主義的事象の域をこえることができないものだということなのである。

「チェコ」と「中国」は現代日本の思想状況に、「民族」と「国家」とにスターリン批判」を持ち込みはした。しかし、それらの多くは教条主義的であったり、歴史主義的であったり、多くの問題を提起しつつも、それ自体問題の渦中にあるといえるだろう。

映画
剥けた情況と自主製作運動

「〝状況〟というのは、一皮むくことに悪くなっているし、よくなっているとは思えなくなっている。たとえば、映画を撮っていて今までわったかれることなんてなかったはずだよ。そういうふうに状況はむけてきているのに、むけてきている状況への対応というものが映画の側はおくれているんだ…」と小川紳介の言葉をまつまでもなく、状況は増々、膨張、肥大化しその中にすべて収束させられんとしている現状に対し、〝むけている状況〟にとり残過感であったろうか。また、すでに〝むけてしまっている状況〟にすら不感症しかあり得なかったのではないか。そのような状況が現実に物質化された際には、あわてふためいて、自らの〝優秀性〟を、あるいは〝脱落性〟を認識し、恥じるといった状況を呈したのである。

たとえば、それは〝TBS放田問題〟を見こみるなら、そのズボラさははっきりしてくるだろう。〝TBS〟が当時、権力側の厳しい監視の下にあり、常に弾圧の機会を狙われていたことを、そして、それ自体非常に切迫した状況を必然的に迫まられていたという客観的な現状認識を相当スタップが、どれほど自己のものとして充分に把握していたであろうか……

そのような、状況の曖昧さのまま、に〝社会派〟番組として〝成田闘争をセンセイション〟にかられて取りあげたのではあったが、そのズボラさゆえに真剣に足元をすくわれてしまう結果を招いたのである。

このように〝むけてきた状況〟への対応としてTBS側は「編集の中立性」をテコにいわゆる〝編集の自主規制の路線〟を敷いてきたのである。しかしながら、この問題は、すでに露見した地点において、TBS側別の枠を明らかに突破し、歴史的な時間帯の収約点としての現在に、本質的な問題を提起していることを考え合せればTBSの犯罪性は明らかになるであろう。

清順問題と五社状況

この〝TBS問題〟と同様に現日本映画状況の象徴的な問題〝むけてきた状況〟として、鈴木清順問題があったのである。

これは、一映画監督の首切りと作品封鎖に端を発した問題であるのであるが、それが単に一作家の操作する映画資本の枠にとどまらず、今日の操作する映画状況を鋭的に集約した深刻な問題を示しているのである。それは〝鈴木清順共闘会議〟の多数の映画作家が、状況に対する危機意識を感じつつも、大同団結し日本映画史上空前の結集をみたことにも裏付けられよう。

日活の新人作が〝売れない映画〟なることによって、鈴木清順自身の根拠としているが、この論理は〝よくない映画〟なる論理を原使に対する〝無責任〟の根拠ともなりうる。

独立プロ運動と映画革新

既存の思想的、文化的な支配からの決定的な別離、即ち作家の内的心然性に基づく、創作活動、現状況との飲むか、飲まれるかという、ギリギリの緊張の有機的関係の中に、自らの思想性を問うという作家の主体的な活動の場が、今日独立プロに提供されたといえよう。

現映画状況を、〝第二の独立プロの時代〟と、現象論的に新名されることに、多数のそして、雑多な独立プロダクション〟が、めまぐるしく高揚しているが、それらを一括して論じることはできない。

しかし〝第一次独立プロ運動〟映画企業の市場の独占支配の一貫性に対して機械的対置された日共の文化政策の所有以上のものでなく、それは故日共、の政治プロパガンダ性を暴露し破産したこれらの運動の証拠が、現在の諸独立プロにも等分に問われているわけである。

現在の諸独立プロは、第一次独立プロの流れをくむ社会主義リアリズム〜代々木の作品運動（ドレイ工場）、〔若者たち〕）があり、五社の上映ルートを使った、大島の創造社、篠田正浩の〔表現社〕吉田喜重の〔現代映画社〕等がある。大島渚は、〔帰って来た酔っぱらい〕〔絞死刑〕を作ったが、迫りくる政治状況の厚刻の前に、わけのわからぬ観念図式を対応させ〝子感映画〟なるものを作ったが映像の色あせは隠せず、増々、混沌の中にもみえている様子である。

これらの運動とは別に、自主制作、自主上映運動を展開している小川プロを中心とする諸プロの活動は、既存の、すでに形骸化した映画状況を根底から揺り動かしているのである。

小川紳介は、三里塚の土中深くのめり込んで〔三里塚の夏〕を撮りあげた。小川は、この映画で、カメラの位置を明確に闘う主体の側に固定しえたようである。

〝圧殺の森〟における〝強奪撮り〟〝現認〟の対時する状況を横から撮る……とジグ・ザグしてきたカメラの位置が実質的に定まり、それ故にカメラが有機物として機能しているのである。そのことを小川プロの吉田氏は「僕らと農民との闘いは、一方ではフィルムに定着化され、一方とは政治という表現過程を作っていった。」と〝映画〟に対する既成の概念ーたとえば映画は映画館でみるものという概念を徹底に破壊し、物質化しつつあるといえよう。このような独立プロの運動の中に、現在低迷腐敗した映画状況を変革する道を模索し、除々に胎動しだしたといえるだろう。

赤外線

〔闘い〕のなかで殺し合い〕のなかに〔歌〕がつくられてゆき、ある人たちは〔憲法〕をもって、うたいだす。……

鳴呼、〔一九六八・日本の昇天〕もまちがえ、いずれ、またやってくる三六五日。ある人は〔危機状況〕を叫び、ある人は〔太平〕をとなえるだろう。混沌と浮かぶ〔状況〕にトップリつかって良き希望で存在するかあるいは、もがきながらも、せめて面面をたして自己主張するか。明日を見出す良き希望も、混迷の中の絶望も〔可能〕だろう。希望的であろうと絶望的であろうと、だれもジャマはしない。ただ、ただ、〔自己の存在〕と〔主体性の確立〕とその他諸々一式を腰のあたりにひっさげて、沈んだり浮かびがったりしているなかで、もがくつづけることの意味を知り〔状況の深淵〕へたどりつくことの本当の意味を知っているのはだれだろう。

〔危機〕と〔太平〕と、〔希望〕と〔絶望〕とが、その他様々な相反する〈主体状況〉の中で雑居している時、水面上と水深一〇メートルとでは、視点もちがうし、視野もちがってくる。

今年の春、北爆停止声明を聞いて、諸国要人が〔これで平和になる〕と語ったナントカ連のオバケンも、チェコ事件をヒステリックに〔解説〕し、〔評論〕したジャーナリスト達の顔も、チリ紙の山となって葬り去られていった。

夜の日比谷公会堂で〔闘いの歌〕が〔団結の歌〕と同時に、〔愛の讃歌〕も聞かれ、〔新宿闘争〕もアスファルトにしみついた〔生活の歌〕がフィナーレを飾ったのだ。

なやかやといっても、人間がこの大宇宙を裁断した時間といっものは、〔希望〕も、〔絶望〕も、〔闘いの感覚〕のなかで〔歌〕の〔殺人〕〔自己〕〔自己〕〔自己